

なくし物

松井淑子

十年ぐらい前から使っている育毛剤がある。効き目のほどは定かではないが、友だちから、とてもいいから使ってみないかと勧められ、以来、使いつづけているものである。まとめて買うと安くなるというので、一度に二本ずつ買っている。

先日、一本を使い切ったので、残りのもう一本を取り出そうと引き出しを開けたら、中にはいいくない。予備の歯ブラシや歯みがきのチューブ、固形石鹸などをしまっておく洗面台の小引き出しである。開け閉めのたびに、いちばん奥にしまっている育毛剤の緑色の箱がいつも目についていた。それが見当たらないのである。

一瞬、誰かに持っていかれたのではないか、とってしまった。だが冷静に考えると、私は独り住まいで、持ち出すような誰も同居していない。仮に誰かが、たとえば空き巣のような者がはいっ

たとしても、育毛剤なんかを持っていくはずがない。要するに、小引き出しの中の緑色の箱の記憶があまり鮮やかに頭に残っているため、今度使い終えたのが二本目であるにもかかわらず、まだもう一本、小引き出しに残っていると勘違いしているに違いないのだ。

そういえばしばらく前、ある知人が、「大切にしているスカーフが、自分が持ち出さないのに、いつものしまい場所に見当たらない。おかしい」と、いかにも誰かに持っていかれたと言わんばかりに騒いだことを思い出した。知人のスカーフへの記憶は私の育毛剤の箱へのそれに相当するのだろうか。知人の気持ちがよく納得できた。

なくし物にもいろいろなケースがあるようである。なまじしまい場所をきめておくため、そこがないと、自分が持ち出したのを忘れ、「ない、ない」とあわてるケース。もう一つは置き場所などをきめておらず、なくなるのが当たり前になっているケース。こちらのいちばんいい例は眼鏡である。

今日も半日がかりで眼鏡を探してしまった。居間のテーブルの上に置いたはずの眼鏡は、キッチンの電子レンジの上に載っていた。